

平成 16 年度科学研究費補助金（基盤研究（S））研究状況報告書

ふりがな	おおむら さちひろ					
研究代表者氏名	大村 幸弘			所属研究機関・部局・職	(財)中近東文化センター 学術局・主任研究員	
研究課題名	和文	古代アナトリアの文化編年の再構築 —カマン・カレホユックにおける前 2-3 千年紀の文化編年—				
	英文	Reestablish (Reconstruction) of an Ancient Anatolian Cultural Chronology - a Cultural Chronology in Kaman-Kalehöyük from the Third to Second Millennium B.C.				
研究経費 <small>16年度以降は内約額 金額単位：千円</small>	平成 14 年度	平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	総 合 計
	19,700	17,200	17,200	17,200	18,100	89,400
研究組織（研究代表者及び研究分担者）						
氏名	所属研究機関・部局・職	現在の専門	役割分担（研究実施計画に対する分担事項）			
大村 幸弘	(財)中近東文化センター 学術局・主任研究員	アナトリア考古学	総括・層位学的発掘調査			
吉田 大輔	(財)中近東文化センター 学術局・研究員	ヒッタイト学	カマン・カレホユック出土の文字資料の解読 と周辺地域の遺跡から出土している文字資料 との比較研究			
中井 泉	東京理科大学・理学部・教授	分析化学	カマン・カレホユックとその周辺の地中探査 及び出土異物の分析			
当初の研究目的（交付申請書に記載した目的を簡潔に記入してください。）						
<p>(財)中近東文化センターは、トルコ共和国のほぼ中央部に位置するカマン・カレホユック遺跡で 1985 年に考古学的予備調査、1986 年から本格的発掘調査を開始、現在に至っている。この発掘調査の目的は、カマン・カレホユック遺跡の文化編年の構築であり、これを通して古代中近東世界、古代南東ヨーロッパ世界のほぼ中間に位置するアナトリアが、歴史的、文化的にどのような役割を演じたかを解明するところにある。特に、アナトリアが古代中近東世界でエジプト、メソポタミア、シリア、キプロスと密接な関わりを持った前 3-2 千年紀に焦点を合わせてカマン・カレホユックで文化編年を構築し、それをもってアナトリアの文化編年を再構築することを主目的としている。本研究によって、前 12~前 8 世紀の暗黒時代の解明、鉄器時代の開始時期、東地中海世界を席卷していたヒッタイト帝国崩壊の原因、アッシリア植民地時代終焉の原因、印欧語族の移動時期等が明らかになるものと確信している。</p>						

これまでの研究経過（研究の進捗状況について、必要に応じて図表等を用いながら、具体的に記入してください。）

1985年にカマン・カレホユック遺跡で予備調査、1986年から今日まで遺跡発掘調査を継続して行っている。この調査の主目的は、『文化編年の構築』であり、1986年、カマン・カレホユックに設置した北区に於いて継続して行っている。2001年、2002年、そして2003年、第Ⅰ層・オスマン時代、第Ⅱ層・鉄器時代、第Ⅲ層・中期・後期青銅器時代、第Ⅳ層・前期青銅器時代の発掘調査を行った。特に、本件に関わる第Ⅱ層、第Ⅲ層、そして第Ⅳ層を中心に調査を進めた。

第Ⅱ層は、出土遺物、遺構の形態により上層から下層へ第Ⅱa層、第Ⅱb層、第Ⅱc層、そして第Ⅱd層に分かれることが明らかとなっている。これらの中で中期・後期青銅器時代と密接に関わっている第Ⅱd層の調査に関して南区のLIV区、LV区の2発掘区で発掘を行った。ここでの問題点は、第Ⅲa層、すなわちヒッタイト帝国時代が崩壊した後、第Ⅱd層に帝国時代の文化的影響が継承されたか否かについて明らかにすることであった。2003年の調査では、両発掘区に残存していた第Ⅱa層の『回廊遺構』の取り外しを行った。その結果、その『回廊遺構』直下から第Ⅱd層の建築遺構の一部を確認することができた。昨年度の発掘調査では、第Ⅱd層の建築遺構の上層部分のみが確認されたただけであったが、ほとんどの遺構が火災を受けていることが判明した。これと同様なことが北区の第Ⅱd層の建築遺構でも確認されており、第Ⅱd層は北区から南区へかけて火災を受けていることが明らかとなった。第Ⅲb層は、ヒッタイト古王国時代であるが、この文化層に関する発掘調査は北区のXXVI区、XXVII区で行った。両区にまたがる形で2001年、2002年にR288、R352の建築遺構を確認しているが、これらの遺構は円形遺構1、円形遺構2、そして円形遺構3に挟まれた形で検出されたものであり、2003年の調査ではこれらの建築遺構の機能を解明することに重点を置いた。R352の建築遺構の石壁の高さは4mを超し、床面も確認することが出来たものの、遺構の機能を解明する糸口を見出すことは出来なかった。R352の南側に位置するR532の遺構の調査も行ったが、遺構内からは壁から崩落した大量の石を確認した。これらの石を取り外したところ、壁の一部が修復されているのが明らかとなった。しかし、2003年の調査期間中に崩落した石をすべて取り外すことは出来ず、来シーズンにその作業は持ち越した。R288、R352を含む一連の建築遺構は、これまでの調査結果から円形遺構1、2、3、4、5と同時期に建造されたことが推測されている。2002年の調査で円形遺構2の床面から多量の炭化した小麦が検出されており、これら5基の円形遺構は穀物の貯蔵用に使用された可能性が高い。円形遺構5基に貯蔵されていた穀物は、その規模から約1万人の一年間の食料であることが推定されている。カマン・カレホユックのヒッタイト古王国時代の人口は、これまで確認した建築遺構の規模から推定して500人程度と考えられる。とすれば、これらの5基の貯蔵庫は、どのような目的で建造されたのかという問題が提起される。既述したR288等を含む一連の建築遺構は、少なくとも貯蔵庫の関連施設の一つで、公共性を帯びた建物である可能性が極めて高いと考えている。

特記事項（これまでの研究において得られた、独創性・新規性を格段に発展させる結果あるいは可能性、新たな知見、学問的・学術的なインパクト等特記すべき事項があれば記入してください。）

トルコ共和国のほぼ中央部に位置するカマン・カレホユック遺跡で発掘調査を行っているが、まず第一に遺跡が東西、南北の十字路に位置していることが本研究にとって最も重要な点であり、文化編年を構築する上で重要な多くの文化層を含んでる。これまでの発掘調査で出土した遺物、遺構形態などをもとに、4つの文化層、すなわち第Ia層、第Ib層・オスマン時代、ビザンツ時代、第IIa層、第IIb層、第IIc層、第IId層 鉄器時代、第IIIa層 ヒッタイト帝国時代、第IIIb層 ヒッタイト古王国時代、第IIIc層・アッシリア植民地時代、第IVa層・中間期時代、第IVb層 前期青銅器時代がそれぞれ確認されている。

第IId層にあたる時期は、欧米のこれまでの研究では文化的にも、歴史的にもほとんど取るに足らない時代であり、前12～前8世紀までを暗黒時代と見なされてきた。しかし、カマン・カレホユックの発掘調査ではこの約450年間の時期は、決して暗黒時代などではなくかなり高度の文化を持っていたことがほぼ明らかになった。第IId層からは、床面が約8枚、つまり8建築層が確認されており、彩文土器、手づくね製土器が出土している。前者の彩文土器は、これまで中央アナトリアで行われた発掘調査ではほとんど確認されていない。また、手づくね製土器は、口縁に刻文が施されており、裏面には器面を調整するための痕跡が認められる。前者の彩文土器は、発掘調査終了後に行っている考古学的一般調査で中央アナトリアでも南側、つまり地中海沿岸へその文化圏が広がっていることが明らかになりつつある。この彩文土器は、中央アナトリアの北側では確認されていないこと、第IIIa層のヒッタイト帝国時代からは一点も出土していないことを考え合わせると、この土器の文化圏は地中海世界との結びつきで捉えられる可能性が高くなる。一方、手づくね製土器の類例は、ゴルディオン、トロイ、トラキアなどの西側の遺跡、地域で確認されており、この点から言えば、この類の土器の文化圏は西アナトリア、南東ヨーロッパとの関連が深いように思われる。これらの点に関しては欧米、トルコの研究者からも注目されており、今後、彼らとの共同研究の中で解明の糸口を探っていきたいと考えている。

第IIIa層、ヒッタイト帝国時代の崩壊の原因は、カマン・カレホユックの発掘調査の中では未解明の部分であるが、これまで通説とされてきた『海の民』による侵攻は、再考する必要が出てきている。一つには、カマン・カレホユックからいわゆる『海の民』に関する遺物が一点も出土していないこと、またボアズキョイ、マシャットホユック、クシャックルなどの主なヒッタイト帝国時代の都市からも『海の民』に関する遺物が全く報告されていないことである。従って、これまでエジプト史料のみに依拠してきた通説には考古学的根拠がなく、その正当性を疑問視せざるを得ない。この点については現在発掘調査中であり、今後の研究を待たざるを得ないが、少なくともヒッタイト帝国崩壊の原因として、内部抗争による経済的疲弊、あるいは黒海沿岸に居住していたカシュカ民族が中央アナトリアへ侵攻してきた可能性も考慮する必要性がある。

ヒッタイト古王国時代の層序からは、大形の円形遺構5基とそれに挟まれた形の大形建築遺構が確認されている。円形遺構が穀物の貯蔵庫として使用されたことは出土した遺物からも明らかであるが、円形遺構と密接に関わっていたと考えられる大形建築遺構については、その機能は未だ明確になっていない。ただ、ここで最も注目すべきことは、ヒッタイト古王国時代、つまり、前16～15世紀にかけてこのような大形の円形遺構を建造した背景には、少なくとも食料の増産が考えられると同時に、カマン・カレホユック周辺地域から穀物を税として納めるシステムが確立されていたのではないかと、ということである。この大形の円形遺構は、多少形態を変化させながら後のヒッタイト帝国時代の都ボアズキョイでも数多く見ることができる。カマン・カレホユックでこの貯蔵庫群がヒッタイト古王国時代に突如その姿を現したことが、ヒッタイト帝国が東地中海世界の覇権を握る過程とどの様に関わるかを今後の研究課題の一つとして考えてみたい。

研究成果の発表状況（この研究費による成果の発表に限り、学術誌等に発表した論文（発表予定のものを記入することも可能。）の全著者名、論文名、学協会誌名、巻（号）、最初と最後のページ、発表年（西暦）、及び国際会議、学会等における発表状況について記入してください。）

本件に関する研究成果は、下記の方法で行っている。トルコ調査報告会（東京）、トルコ調査研究会（東京）、国際発掘・一般調査・分析シンポジウム（トルコ、コンヤ）に於ける口頭発表、アナトリア考古学研究・カマン・カレホユック・の刊行。

トルコ調査報告会（2003年度）の調査報告、トルコ調査研究会（第14回）は、2004年4月17日（土）4月18日（日）に公開で行った。今回のトルコ調査報告会にはアナトリア考古学の第一人者 T・オズギュッチ教授をトルコからお招きし、基調講演をお願いした。また、トルコ調査研究会では、カマン・カレホユックの前2千年紀を研究する上で最も重要と考えているキュルテペの研究成果の発表も含めた形で行った。調査報告会、研究会は下記の通りである。

2004年4月17日（土）トルコ調査報告会（2003年度）

- * 第18次カマン・カレホユック発掘調査及び中央アナトリアにおける考古学の一般調査 / 大村幸弘（中近東文化センター）
- * キュルテペ・カールム発掘調査 古代中近東最古の商業都市 / タフスィン・オズギュッチ（元アンカラ大学学長）

2004年4月18日（日）トルコ調査研究会（第14回）

- * カマン・カレホユック第III層出土土器の研究(3) 層序に基づく編年的考察 / 勝野正（マルブルク大学）
- * 土器によるカマン・カレホユック鉄器時代時期区分 / 松村公仁（中近東文化センター）
- * カマン・カレホユック出土の青銅製鋸歯状刃ナイフについて / 山下 守（中近東文化センター）
- * Early Bronze Age Animal Exploitation Patterns at Kaman-Kalehöyük / レベント・アトゥジュ（ハーバード大学）
- * カマン・カレホユック遺跡北区における¹⁴C年代測定（予報） / 渥美晋（東京理科大学）
- * カマン・カレホユック遺跡出土遺物の物質科学的研究（12）
概報 / 中井泉（東京理科大学）
組成分析によるスラグの分類について / 増淵麻里耶（東京理科大学）
黒色超磨研土器の焼成技法について / 白石圭代（東京理科大学）
- * 北部アナトリアにおける黒耀石原産地の調査およびトルコ国内黒耀石原産地の蛍光 X 線分析による判別について / 小林克次（山梨県工業技術センター）
- * トルコ・アナトリア高原における乾湿変動と遺跡立地—カマン・カレホユックおよびキュルテペにおける地形地質調査より / 鹿島 薫（九州大学）
- * キュルテペ・カールムにおける地中探査 / 福田 勝利（東京理科大学）
- * カマン・カレホユック出土の 中期ヒッタイト の印章 / 吉田 大輔（中近東文化センター）
- * キュルテペ文書について / 渡辺 和子（東洋英和女学院大学）

国際発掘・一般調査・分析シンポジウムは、2004年5月24日～28日まで、トルコ共和国コンヤ市、セルジューク大学で行われる。このシンポジウムには、昨年度トルコ共和国で考古学的調査を行った研究者が一同に集まり、前年度の調査成果を発表することになっている。このシンポジウムでは、2003年に行ったカマン・カレホユックの北区に関して発表を行う予定である。

また、「アナトリア考古学研究 XIII・カマン・カレホユック XIII・」では、下記のカマン・カレホユック調査に関する論考が発表される。刊行は2004年6月下旬の予定である。

- * Preliminary Report on the 18th Excavation at Kaman-Kalehöyük (2003) – Sachihiko OMURA
- * Preliminary Report of the General Survey in Central Anatolia (2003) – Sachihiko OMURA
- * Conservation Director's Report 2003 Season- Glenn WHARTON
- * Field Conservator's Report 2003 Season - Charles HETT
- * Beobachtungen zur Keramikentwicklung der Schicht III von Kaman-Kalehöyük - Tadashi KATSUNO
- * Transition from the Bronze Age to the Iron Age in Central Anatolia : A View from Faunal Remains from Kaman-Kalehöyük - Hitomi HONGO
- * The Geo-Archaeological Research Project at Kaman-Kalehöyük and Surroundings in 2003 - Kaoru KASHIMA
- * Obsidian Points Excavated from Kaman-Kalehöyük - Katsuji KOBAYASHI
- * Geophysical Survey on the Karum of Kültepe "Kani" : City Wall of the Karum - Katsutoshi FUKUDA
- * X-ray Fluorescence Analysis of Copper-Based and Noble Metal Artifacts from Kültepe Measured at Kayseri Archaeological Museum - Mariya MASUBUCHI
- * Archaeometallurgical Analysis of Iron and Copper Objects from the Stratum IIIb to Stratum IIa at Kaman-Kalehöyük in 2001: Correlation between Composition and Archaeological Levels - Hideo AKANUMA
- * Archaeobotany at Kaman-Kalehöyük 2003 - Andrew S. FAIRBAIN
- * Preventive Conservation at Kaman-Kalehöyük - Margaret KIPLING
- * Conservation of Excavated Iron Objects from the Archaeological Site of Kaman-Kalehöyük : A Closer Look - Claudia G. CHAMELLO
- * Developing a Firing Program for Cuneiform Tablets in the Field - C. Mei-An TSU